

認知症という明滅——「若年性」男性が手記

世界から名詞が消える痛み

世界から名詞がどんどん剥がれていく。関西地方に住む若年性認知症の会社員の男性(56)が、記憶を失い始めた自身の姿を克明につづった手記を毎日新聞に寄せた。症状が進む自らの感覚を冷静に見つめ、忘れることの痛みや苦しみを率直に描いている。男性は「認知症になるとつらい気持ちも分からなくなると思われがちだが、記憶を失いもがき苦しんでいることを理解してほしい」と訴えている。

【山崎友記子】

〈世の中は名詞で埋まりま
す。「認知症」と突然、医師から
告げられて、後から私は認知
症になりました。(中略)ただ
の記憶の忘却がその瞬間に「認
知症」という重い病の雨になっ
て降り注いできました〉

も動けない、不安ばかりが洪水
となって流れこむ、それは認知
症だから
認知症は高齢者になるものと思
っていた。すぐに徘徊や妄想が始
まる、というイメージしか持てな
かった。ショックで三日三晩泣き
続けた。妻(47)は「治らない認知

記憶の森に広がる砂漠

症はがんよりひどい」と嘆き、人
には認知症のことを言わないよう
男性に口止めした。

言葉を失ったら、何も書けなく
なるのではないか。今のうちに体
験や思いを書き残したい。若い時
から読書家だった男性はパソコン
に向かい、告知から2、3カ月の
間に、いくつも文章をつづった。

〈名前をよく忘れるので何と
か思い出すと、その度に(スマ
ートフォンの)アイフォーンに
メモとしては覚えます。この効
果は抜群で、一回忘れた十数名
の名前や場所名が今は再現され
ます。それはうれしいです。

でもそれ以上に、世界から名
詞がどんどん剥がれていく。コ
ーヒーカップが消えたりする魔
法にもよく感染します。何でも
ない日常生活が、いつも冷や冷
やしてかなり疲れます〉

男性はその後、若年性認知症に
理解のある専門医らに出会い、精
神的に落ち着いた。文章が書けた
ことも自信につながり、現在も短
時間勤務ながら仕事を続けてい
る。一方、テレビのリモコンや時
計の場所が分からなくなって悩む
こともある。

「複雑化してスピードを求めら
れる社会は、認知症の人には生き

失われゆく私

月。物忘れがひどくなったのを機
に脳神経外科を受診すると、いく
つかのテストの後に、医師から認
知症と告げられた。

〈「薬を出します」と雷鳴が
鳴り響き、踏切が突然、閉まり
特急電車が走る。なのに私は何

男性が毎日新聞に寄せた手記の一部

忘れるということとは、ただ単に忘れる
ということではなく、大きく穴を開けた
傷に塩をすりつけるほどの痛みがありま
す。

いつも会っている人の名前が驟雨の
如く流れ消え去る。それは大事な世界を
落としたことになり、自分自身が崖に滑
落したような大きな痛みと悔しさにあふ
れる。

(中略)

あなたがあなたであるということは、
記憶の森に住んでいるからである。私は
どんどん砂漠が広がり始めて自分すらも
見失うのである。

ひとつの名詞の大切さを今は思う。世
界は名詞から創造されており、私はそこ
から剥がされようとしているのだ。それ
は恐怖なのである。認知症とは世界への
大きな恐怖を伴っている。

あなたが認知症の患者を見る。しかし
認知症者にはあなたを区別ができない。
名前がないからである。記憶も未来もま
た忘却によって喪失してしまう。

多分これから私は名前のない砂漠のよ
うな世界に暮らすのではないかと思う。
いつか愛する妻も忘れるのだろうか。そ
れだけはやめてほしい。

(一部改行や句読点の挿入を行いました)

愛する妻も忘れるのか

にくい。忘れたり、道に迷ったり
することを責めたりしない、寛容
な社会になってほしい」と男性は
語った。

男性は、毎日新聞が1日から連
載した「認知症新時代」を読んで
手記を寄せた。まとめるために過
去の文章を振り返ったが、告知1
カ月後の昨年6月には、最後をこ
う締めくくっていた。

〈世界は鬼ごっこをして私の
前からよく消えますが、でも
やれることを全てやりたくい
と思います。応援をお願いしま
す〉